

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	36 / 2015 / 31 - 33 (再編集版)
タイトル	街のスズメバチ考
著者名	三浦博

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

街のスズメバチ考

第17代 三浦 博

8月初旬のとある日、「お父さん、最近家の廻りをスズメバチが飛んできて花の手入れができないのでなんとかして下さいな」……。

「どうせ斥候バチだから普通にしていれば刺されないよ」とは言ったものの、なるほどキイロスズメバチとおぼしきスズメバチが頻繁に飛んできます。

自宅は青森高校に近い筒井地区にあります。青高生だった昭和40年頃は田園地帯でしたが、現在は住宅が立ち並びかつての面影はほとんどありません。それでも自宅裏は、放置された畑が雑木林となってニセアカシアが林立して、ここがスズメバチの生息地と思われました。

さて、なんとかしようと思いついたのが、山でたまに見かけるペットボトルを利用したスズメバチ・トラップです。ノウハウは無いのでインターネットで検索するとかなりの作り方がヒットします。ほとんど似通っていますが、大別するとペットボトル容器をそのまま利用して窓をつけるAタイプと容器のカーブを過ぎたあたりで二つにカットして、口を逆さまにしてピッタリ合うようにしたBタイプです。

Aタイプはペットボトル2/3ほど上部に穴を2~4ヶ所開けるものです。入口穴は1.2~1.6cmの正方形で底となる部分を内側に折り込むものや、H型に切れ込みを上下内側に折り込むものなどです。また中心に穴を開けて、ハサミで放射状に直径3~4cmの切れ込みをいれたのち内側に折り曲げるものなどいろいろなタイプがありますが、いずれもいったん入ったスズメバチが出られないよう工夫されているものです。

Bタイプはペットボトル1/4ほど上部で二つにカットして逆さまにはり合わせたもので、入口穴はそのままペットボトルの口を利用します。長めのハリガネで固定してそのまま小枝などに固定しますが、雨が入りやすいので軒先とか屋根をつけるなどの工夫が必要です。

トラップで使用する誘引剤(集蜂液)ですが、スズメバチは基本的には肉食系昆虫なので肉を誘引剤とすればいいのですがちょっとたいへんです。樹液にも集まるので酒や砂糖などで醗酵作用を利用して樹液に似た匂いを作り出して誘引します。

誘引剤レシピはさまざまで、最も多かったのが「清酒：酢：砂糖 = 180ml:60ml:75gの割合で混合」です。割合はこのほか「2:1:1」「2:1:2」「4:1:2」など。ほかにグレープジュースを加えるものや焼酎とオレンジ、カルピスと水などです。

さらに、これらは作ってから醗酵が進むので時間の経過で誘引効果が変わるでしょうから、比較実験のテーマにでもなりそうです。

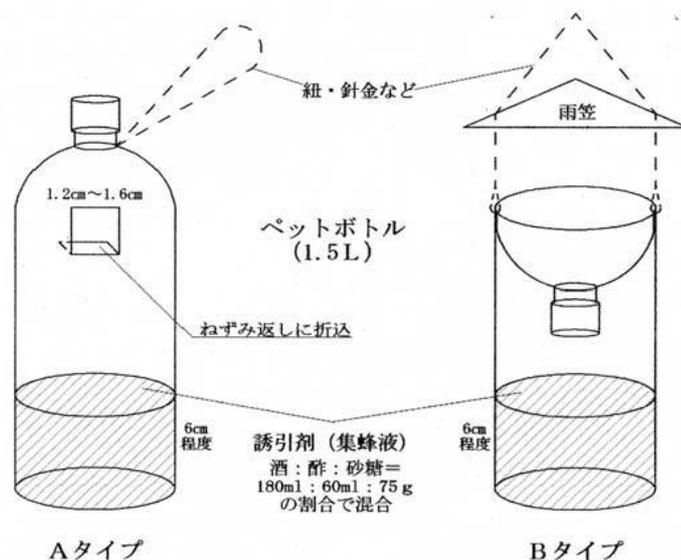


図1 2種類のスズメバチ・トラップ

さて、予備知識を得て勇躍作り始めたものの、ペットボトルの形状は断面が四角型や丸型のもの、表面は波型やフラット型など様々で選択になやむことになりました。結果的にはどんな形状でも大差がありません。最初は炭酸系の凹凸の無いドーム型が蜂は滑って上ってこられないと考えましたが、液に落ちた蜂は、初めは滑って這い上がれないものの時間が経つと、酒や砂糖でできた誘引液は粘質のこともあって、内壁にじよじよに付着して何分もしないうちに蜂は容器の中を自由に歩き回れるようになります。

最初に作った仕掛けは、Aタイプのトラップで蜂が入り易いように大きめの2.0cmの正方形の窓を3ヶ所開け、誘引剤は標準的な配合を採用しました。

自室の窓から見える庭木に吊るして待っていると、どこからともなくスズメバチがやってきてトラップの窓縁に脚をかけて簡単に入り込みました。容器の中で少し飛ぶとまわりにぶつかってすぐ誘引液に落ちました。液の中で少しもがいていましたがやがて壁を登り始め、途中で落ちては再び登るのを繰り返して容器内を歩き回っているうちにトラップの窓から頭が出ると容易に外に飛び去りました。次の個体も同じでした。液に落ちて羽は簡単には濡れず、這い上がっては大きめの窓から脱出しました。脱出経路を学習すると同じ個体が餌場として来ていました。

これを教訓に、窓の大きさが大きければ逃げ出され、小さければ入らずと何度か調整して1.2cm～1.4cmに落ち着いたもののそれでも何匹かは逃げ出します。

次にBタイプのトラップを作りました。これはなかなか成績が良くほとんど逃げ出すことはありませんでした。これは一旦トラップに入った個体は上方向へ登る習性から、内側下方向にある入口には行かないためと思われました。ただし、このBタイプは雨の日は屋根をかけないと雨量計みたいに雨水が溜まってすぐ使えなくなりました。

こうして、2014年8月12日から14日まで3日間の採集結果はモンズズメバチ13匹、キイロスズメ



写真1 キイロスズメバチ背面



写真2 キイロスズメバチ腹面



写真3 キイロスズメバチ頭部



写真4 モンズズメバチ背面



写真5 モンズズメバチ腹面



写真6 モンズズメバチ頭部

バチ2匹の計15匹の結果となりました。

当初はすべてキイロスズメバチと思っていたのですが、以前に採集したものと比べると少し雰囲気が違うので精査してみると、胸部の下で腹部と接する部分の小楯板(しょうじゅんばん)と呼ばれる部分の色がキイロスズメバチでは黄色なのに、黒褐色だったので図鑑で調べるとモンスズメバチと判別しました。そうしてみると、キイロスズメバチは夕刻には活動しなくなると思っていたので、日が落ちて薄暗くなった中を飛んでくるので奇異に感じていましたがモンスズメバチの習性と記されていたので納得したことでした。

キイロスズメバチより圧倒的にモンスズメバチが多いのは誘引液の好みによるものなのか、生息密度によるものなのかはわかりませんが営巣場所の環境によることが大きいのかもかもしれません。



写真7 キイロスズメバチの巣。中が2014年、左が2013年に造られた。右側にスケールを付したが、その上端左に2012年の巣の基部が残されている。

私は、まだ自宅周辺にこれらのスズメバチの巣を確認していません。よく行く郊外の里山の倉庫軒下にキイロスズメバチの見事な巣があります(写真7)。右端にスケールを付しましたが、真ん中が2014年の巣で基部から下まで50センチあります。左は2013年のもので60センチ、雨かぜで破損が激しいのですが全体像がよく分かります。軒下の右側に黒い部分が見えますが、これは2012年の巣で落ちた跡です。この場所は、よほどスズメバチにとって良い環境だったのでしょうか。一番新しい巣では11月までブンブン、ハチが出入りしていました。ここで興味深いのは、2013年の巣が2014年のものより大きかったことです。2013年がハチにとって過ごしやすい年だったのでしょうか。

来年は街中の巣の発見とか、さまざまなことを念頭に置きながら観察を続けたいと思います。二つの種は当然、生活上の競合があるので変わった習性があるのではないのでしょうか。

スズメバチの駆除をしようとしたのが、ひとつの観察テーマになってしまいました。

こうして今回のスズメバチ捕獲作戦は終了しましたが、トラップに落ちて死ぬまで2~3時間はかかります。まるで拷問でもしているようでいい気はしませんでした。もっとも酒をたらふく飲んで昇天したのだからまあいいかと妙な納得をしたことでした。バランスが崩れない限り無益な殺生はしたくないものですがバランスを見極めるうえで貴重なデータを集めているのだと言い訳を考えたことでした。